

E—19 家政学の対象としての「家庭の生活構造」 について

県立新潟女短大 浅妻 康二

1. 本研究は家政学の体系化がさかんに論じられながら、なにを具体的な手がかりとして展開するかについて

て、いささか疑問があるので、行動科学の理論の適用によって、家政学の体系化に接近しようとするものである。

2. いますぐに、断定を下すことには慎重でなければならないが、家政学は「家族構成員の相互作用を通して展開する生活におけるエネルギーを規範によって規制された仕方で消費し、状況内の目的を達成するように方向づけられた行動」を研究対象にするものである、と一応提案したい。「家庭の生活構造」という仮設によって、行動科学にむける総合的理論の摘要の可能性について言及する。

3. その事例として新潟県における実態（その資料は別に配布）を通して「家」から「家庭」への展開過程を説明し、「家庭の生活構造」のパターンの把握の問題についてふれる。